

【論文】

大東文化大学文学部歴史文化学科蔵『四書蒙引』について

——併せて古籍の管理・運用のあり方を問う

湯城吉信

はじめに

歴史浅きこの歴史文化学科に中国の明代に出版された古籍『四書蒙引』が所蔵されることになった(図1)。本稿では、その経緯及び本書の基本情報を紹介し、併せて古籍の管理・運用のあり方を問いたい。

なお、漢文の漢字はすべて現代の通用字体に直した。また、画像はすべて筆者が撮影したものである。

一、歴史文化学科に所蔵されるようになった経緯

本章では、元来、大東文化大学図書館の貴重書として保管されていた『四書蒙引』がなぜ廃棄処分されること

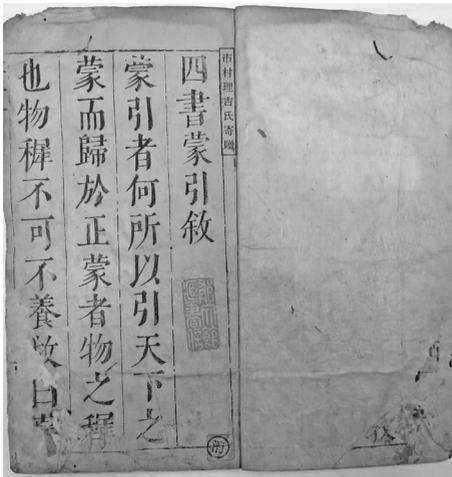


図1 四為齋文庫本『四書蒙引』冒頭部
(歴史文化学科蔵)

*印は「市村理吉氏寄贈」、「郁文館藏書信」、「大東文化大學圖書館印」(消印あり)。

になり、それがどのようにして歴史文化学科に所蔵されることになったかの経緯を説明したい。

(二) 廃棄に至った経緯

二〇一九年度、大東文化大学板橋キャンパス図書館で貴重書として保管されていた『四書索引』が廃棄されることになった。筆者は図書委員会で同書が廃棄リストに挙がっていることを発見し、図書館に確認したところ、理由は以下のものであった。

- ・痛みが激しい。(紙がくつついて読めない状態にある。)
- ・欠本がある。

実見させてもらって確認したところ、確かに紙がくつついて読めない状態にあり、本の状態はくつついた全体が波打っており、しみも多かった。おそらくは濡れたことがあるためであろう。ただし、虫食いはほとんどなく、紙の劣化(強度の低下)もそれほどないので、古籍の状態としてそれほど悪い状態だとは思えなかった。問題は「紙がくつついている」ということだけである。そして、大東文化大学に所蔵されてから(詳細は第二章で述べる)

は、貴重書庫で管理されたことを考えると、上記の「濡れ」は所蔵当時すでにそうであったと推測できる(所蔵後作成された帙にしみがないことから確認できる)。これは、本書に限った話ではないが、大東文化大学図書館の蔵書は全く見られずにしまい込まれたままになっている本が多い。本書もその一例と言える。

ただ、そもそも貴重書として保管する価値がある本だとすると「状態の悪さ」は廃棄理由とはならないはずである。少なくともまずは「修復可能性」を考えるべきであろう。

また、「欠本がある」はさらに廃棄理由とはならない。貴重な本であれば、十五冊の一冊が欠けているぐらいで価値はなくなるらない。それにそれを問題視するなら収蔵当初からそうであったのだ。また、第三章で説明するように、欠本はそのテキストの歴史を知る上で貴重な情報であり、むしろ価値を有すると言える。

以上の筆者の認識は図書館にも伝えたが廃棄の決定が覆ることはなかった。

(二) 歴史化学学科に所蔵された経緯

廃棄はあまりにも忍びないと伝えたところ、図書館から「歴史化学学科で保管してもらえばどうか」という提案があり、消印を押し登録を抹消した『四書索引』が歴史化学科（資料室）に保管されることになった。筆者は、温度・湿度管理がされていない場所で保管されていた古籍が傷んだことを何度も目にしてきたので、今回の移動が望ましいことだと思わない。ただ、第二章以下に説明するように、このテキストは公的機関で保管しその存在を社会に公表する価値があるものなので、「準」公的機関とも言える本学科で保存されることは次善の策だと考える。また、それが本稿でその存在を明らかにする所以である。

(三) 歴史化学学科所蔵後の処置

筆者の意見では、本書は準貴重書あたりに分類して、閲覧希望者が（少なくとも学内の教員は事前予約などなしに）自由に閲覧できるべき資料である。¹他の図書館で同様の本が貴重書として閲覧に制限がかけられているこ

とはない（第三章参照）。

そこで、歴史化学学科に移動されてから、筆者は素人仕事ながら修復を試みた。問題は上記の「紙がくっついてる」ことだけであり、はがれそうだという見込みと経緯からして少々も破損はやむを得ないと考えたからである。

本の状態

上記のように、しみや波打ちを見ると本が濡れたことがあったのだろうと思われる。その際、紙が薄く、印刷されている表面が滑らかなため、お互いにくっついたのであろうと思われる。ただ、和紙ほど丈夫でもないが、折れば破れる竹紙のような脆い紙質でもない。また、くっついたため（逆に裏面は表面が荒く比較的くっつきにくかったため）袋とじの折った部分がかんりの割合で破れていた。

筆者の処置

完全に素人仕事だが、資料をできるだけ無事に使える状態に戻したいという思いを持って、できるだけ傷つけずに修復することを心がけた。専門家に対処してもらえ

れば問題なく修復できると思われたが、資金が必要なことから、自分で注意深く紙をはがした。結果、一部破れることはあったが、ほぼきれいにはがれた。(はがれにくい箇所は蒸気を使うことも考えたが危険性も感じたのでやめておいた。)

上記の処置により、破損のない部分はほぼ読める状態になった。ただ、今後、温度・湿度管理ができていない資料室に置かれて、状態がどのように変化するかが心配である。

二、本書の来歴

本書には「市村理吉氏寄贈」印が押されており、本書が市村理吉氏から大東文化大学図書館に寄贈されたことがわかる。その経緯については、三浦國雄「大東『漢学』の一側面―市村理吉と四為斎文庫」(『大東文化大学漢学会誌』五十一号(池田教授・三浦教授退休記念号)、大東文化大学漢学会、二〇一二年)において詳しく説明されている。

市村理吉(一九〇八―一九九六)は、大東文化大学

の卒業生である。母方の伯父・吉田英厚(一八六三―一九四五)のもとで育てられ、漢学を授かりその蔵書を受け継いだ。吉田英厚は崎門派の朱子学者で、上総同学の人々と交流があったという。平成六年(一九九四年)一月三十一日、この市村理吉の蔵書が大東文化大学図書館に受け入れられた。全六五三三冊あり、吉田英厚氏の号にちなむ四為斎文庫を正式名称とすべきであるが、大東文化大学図書館では市村理吉文庫と呼んでいる。三浦氏は、日本思想、特に崎門研究にとって無視できない文庫であると言う。

なお、板橋キャンパス図書館で貴重書登録されている『四為斎文庫目録』(板橋貴重書庫 KC335⁴) (図2)には『四書蒙引』は見えないが、同じく貴重書登録されている『四為斎文庫書目』(板橋貴重書庫 KC342⁵) (図3)には『四書蒙引』の名が見える。

『四為斎文庫目録』は、昭和六年から七年に書かれたらしく、『四為斎文庫書目』は昭和十八年の日付が見える。そこからすると、『四書蒙引』は昭和七年から十八年の間に市村理吉が入手したのかもしれない。また、『四

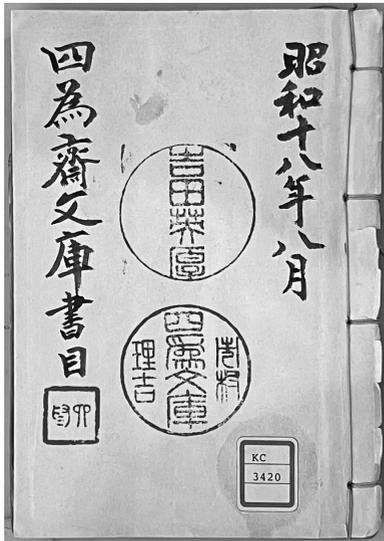


図3 『四為齋文庫書目』表紙
(大東文化大学図書館蔵)

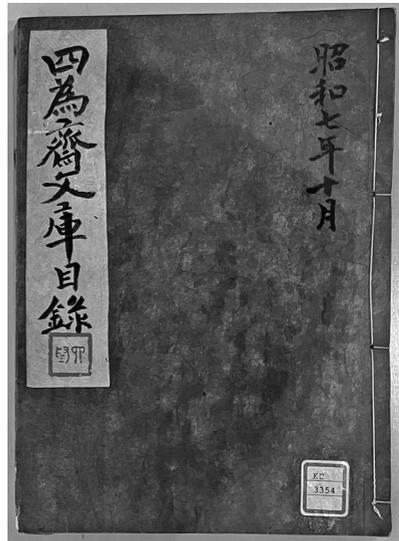


図2 『四為齋文庫目録』表紙
(大東文化大学図書館蔵)

為齋文庫書目』に「四書蒙引 蔡虚齋 二十」と見えるので、昭和十八年当時は二十巻そろっていたかのかもしれない。だが、巻数なので末尾の二十巻だけ記して欠本には触れていないかもしれない。なお、本書は現在の茨城県にあった土浦藩の藩校の郁文館の旧蔵書である（第三章参照）が、上総の儒者を通じて入手した可能性もあるかもしれない。

以上のように、本『四書蒙引』は四為齋文庫（市村理吉文庫）の一部をなしていた書物であり、文庫自体に価値があるとすれば簡単に処分すべきものではなかったはずだ。

三、本書の基本書誌情報

本章では、この『四書蒙引』の基本書誌情報を報告したい。

本書は、明本の『四書蒙引』である。全十五巻の中、五巻を欠くが、本校に所蔵された後に作られた（欠本を除いてびつたりのサイズに作られていることからわかる）三つの帙に収められている。

サイズ：縦二五・五、横十三・四cm。

装丁：五針眼丁法。(表紙および糸は後のものらしい。)

用箋：四周単辺。匡郭：縦二十一・八cm、横約二十四・七cm。

有界。每半葉九行、毎行二十四字(本文は一字段下げ)。

版心：四書蒙引・魚尾・卷数・葉数。小口書きあり(「蒙引」・篇名・卷数)。

内題：「蔡虚齋先生四書蒙引(書名・卷数)」「掲嶺宋兆輪爾字重訂 門人 吳思穆靜腑甫／程雲鵬九万甫／較」

*欠本：五卷(『論語』冒頭(学而／公冶長)。…他は揃っている。)

表紙は後に日本で補修されたものらしい。材質は和紙らしく、綴じ糸も太い。また、のどあたりが詰まっており見にくい。最初または最後の葉が表紙にくっついていて(一体化している)ものがある。おそらく、新しく表紙をつける時に糊が浸みてくっついたのであろう。本表紙が後からつけられたものである何よりの証拠は、内閣文庫にある同刊本の表紙が薄い紙であり、それが原表紙であると推測できるからである。

この表紙には題箋は貼られていただろうが、今は十二巻に切れ端(縦十七・六cmの題箋の上下一部のみ。上部に「蒙」の字が残る)が残る以外はすべて見えない。四巻のみは直接、「蒙引」と書かれている(書き題箋)。他、表紙は『孟子』のみ朱筆で篇名が記されている。

その他、和紙で補修(裏張り)している箇所もある。裏表紙の最後の和文は未解説である(課題)。この表紙の様子を見ても、和綴じ本というものが補修しながら保存されてきたものであることがわかる⁵⁾。

第一帙

巻一 大学 宋序五葉、自序五葉、本文(大学) 百葉。

書き入れ・朱点、藍筆点、墨筆書き入れ。裏表紙に和文書き入れあり(未解説)。

巻二 大学 本文七十三葉。裏表紙裏に「豊之」とあり。書き入れ・朱点、藍筆点。

巻三 中庸 本文八十三葉。書き入れ・朱点、藍筆点。

巻四 中庸 本文百二十九葉。表紙に「蒙引」と題名あり(直接)。

卷五 欠本

卷六 論語上卷（雍也〜郷党） 百二十葉。書き入れ・朱点。

第三帙

卷十一 孟子（上孟） 本文九十六葉。表紙右上に朱筆で「滕文公上／滕文公下」と書かれている。シミもあるが本の状態は比較的よい。書き入れ・朱点（全体ではない）。34aに朱筆で「錯簡」とある。

第二帙

卷七 論語下卷（先進〜憲問） 本文百五十七葉。

波打が激しい。シミが広がっている。書き入れ・朱点。38bに朱筆で「説得而甚好」、39aに「亦甚好」とある。末尾に大東の蔵書印あるも消印押し忘れ。

卷八 論語下卷（衛霊公〜） 本文百三十一葉？（最後の葉は裏表紙と合体している。）書き入れ・朱点、藍筆

点（最後のあたりは点がない）。

卷九 孟子（上孟） 本文百五十五葉。上部末尾付近

にカビの跡および水濡れの跡あり。表紙右上に朱筆で「序／梁惠王上／梁惠王下」と書かれている。書き入れ・朱点（全体ではない）。

卷十 孟子（上孟） 本文百四十三葉。表紙右上に朱

筆で「公孫丑上／公孫丑下」と書かれている。書き入れ・朱点（ただし少ない）。

卷十二 孟子（下孟） 本文百五十三葉（最後は表紙

とくつついておりまだはがせていない）。表紙右上に朱筆で「離婁上／離婁下」と書かれている。唯一題箋の切れ端が残る（「蒙…」）。書き入れはなし。上部に虫食いの跡あり。シミの跡もあり。

卷十三 孟子（下孟） 本文六十三葉。表紙右上に朱筆で「万章上／万章下」と書かれている。書き入れ・朱点（若干）。

卷十四 孟子（下孟） 本文九十葉。表紙右上に朱筆で「告子上／告子下」と書かれている。書き入れ・朱点（若干）。

卷十五 孟子（下孟） 本文百二十八葉（最後の二葉の葉数は破損で見えない）。表紙右上に朱筆で「尽心上／尽心下」と書かれている。書き入れ・朱点（前半は多

い)。裏表紙はなくなっている。

*書き入れを見ると、どこが読まれていたのかわかる。

出版年・弘治甲子序（十七年、一五〇四年）があるが、同じ版本だと思われる内閣文庫本（第四章（三）内閣文庫1参照、嘉靖丁亥（一五二七年）林希元序、崇禎八年出版許可書がある）に基づけば、おそらく崇禎八年（一六三五年）の刊本。

印記・「市村理吉氏寄贈」印。「郁文館藏書信」「大東文
化大学図書館印」（消印あり）。

書き入れ・二巻裏表紙裏に「豊之」と書かれている。日本人の「豊之」（『増補改訂漢文学者総覧』に見えない）が点を切ったか。（読点に当たるのは字の真下に、句点に当たるのは字の右下にある。）朱筆で点。それ以外に評点（圏点）もあり。人名に縦一本線（取り消し線のよ
うに）、地名に縦一本線（字の右、上論六卷7b）、書名に縦二重線（取り消し線のように上論六卷14a。上論六卷118b）。印刷が不鮮明な字を朱筆で補っている箇所もある。上論六卷76bに「説得好矣」という書き入れあり（中国人っぽい）（下孟七卷38bに「説得而甚好」（日本人的？）、39a

に「亦甚好」とあり。）。桃色の紙を貼っている箇所あり（現代で言うのと附箋を付けているようなもの？）。朱筆で語の意味を書き入れている箇所もある。

*ラベルがはがされた跡および二葉表欄外にある算用数字八桁の数字（資料番号）に取り消し線が入っているのは、今回の廃棄処分
の形跡である。

書誌情報は以上のようなのだが、以下、若干説明を加えておきたい。

まず、欠本についてである。複数冊がセットになった古籍では、一巻目だけ傷んでいることが多い。これは一巻目が見られることが多かったからである。最初の部分だけ読んで挫折することが多かったことが主な原因だが、一巻の冒頭に目次など重要情報があり手に取られることが多かったことなどが原因になっている場合もある。本書で、『論語』の前半部がなくなっているのも同様の理由であろう。ここが一番読まれる部分であり、誰かが自分の手元に置くか、もしくは、よく読まれている中で紛失したのであろう。ちなみに、『論語』は第六章

の雍也篇あたりで挫折する人が多かったため「雍也論語」という言い方があった。ちなみに、本書をめぐって書き入れがある箇所をたどれば、この本の読者がどの部分が読まれていたかを確認することができる（研究対象の一つとなる）。

次に、蔵書印についてである。蔵書印は所蔵者を表すものであるが、所蔵者が変わることによって追加して押されていくので、その本の所蔵者の変遷を確認することができる。古籍においては重要な情報である⁶⁾。

本書の蔵書印に見える「郁文館」とは現在の茨城県にあった土浦藩の藩校の郁文館のことである（所在地には現在、茨城県立土浦第一高等学校がある）。寛政十一年（一七九九年）に開校したが、明治四年（一八七一年）の廃藩置県の際に廃校となった。この蔵書印は、東京大学総合図書館蔵『晦庵先生朱文公文集百卷目録二巻續集十一巻別集十巻附考異』（嘉靖十一年（一五三二年）序、南葵文庫（紀州徳川家））にも見える（図4）。筆者も実見したが同一印であることに間違いはない（図5）（注）。なお、この東大の『晦庵先生朱文公文集』に同じ印があ

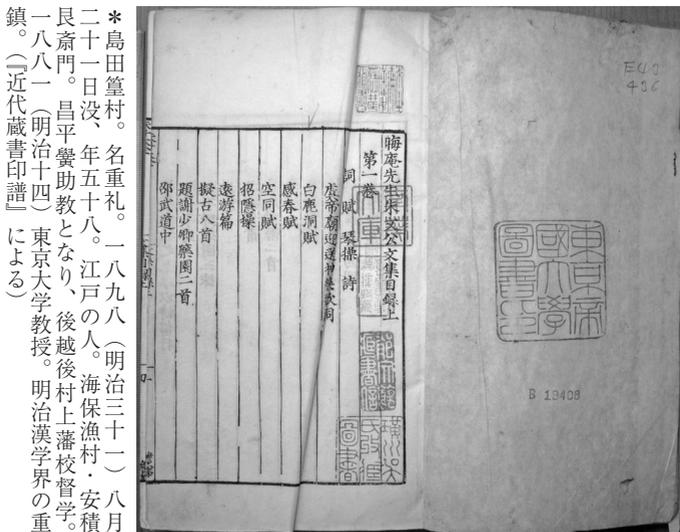


図4 東京大学総合図書館蔵『晦庵先生朱文公文集』冒頭部に見える印記
下から上に「横川呉氏收藏圖書」「郁文館蔵書信」「島田氏雙桂樓收藏」「南葵文庫」、
右に「東京帝國大學圖書印」。所蔵者がこの順番で変わっていったことがわかる。

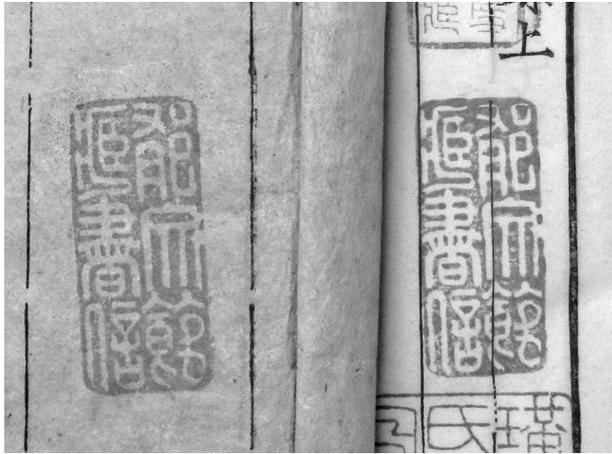


図5 大東本『四書蒙引』(左)および東大本『晦庵先生朱文公文集』(右)冒頭部に見える「郁文館藏書信」印 *全く同じものである。

(注) 平野喜久代『蔵書印集成』(東京大学出版会、一九七四年) 卷一11に見える(縦4cm、横1.8cm)。
 <国立国会図書館編『人と蔵書と蔵書印』(雄松堂出版、二〇〇二年) NO.262、p.266には「郁文館」印の印影が見え、「郁文館の旧蔵書は現在どこにあるのか不明である」と言う。大東文化大学が蔵していた『四書蒙引』はその一部であり、蔵書の散逸をたどる上で重要な史料である。
 その他、京都大学付属図書館蔵『國朝諸老先生論語精義10巻』も同様に、「郁文館藏書信」の印記がある(未確認)。
 京都大学蔵『孟子集註大全』に見える「郁文館」の印は国文学研究資料館HPの蔵書印データベースで公開されている(http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/detail)。東京大学農学生命科学図書館蔵『齊民要術』にある「郁文館」印も同様の印か？

るらしきことは東大の蔵書検索の書誌情報で印記まで詳しく述べられているおかげで確認することができた(先に重要情報と述べた所以である)。また、特筆すべきは、東大総合図書館においては、この本は外部者の筆者も予

約なしに閲覧・撮影することができたことである。大東文化大学との違いの大きさには驚くばかりだ。大東文化大学も、研究に便宜を図りたいという意思があるなら、まずは基礎的な書誌情報を収集して公表すべきである。

以上、本章では本書の書誌情報を紹介した。藩校・郁文館の蔵書であったという来歴からして、本『四書蒙引』が保存価値がある資料であることは明らかであろう。

四、『四書蒙引』について

前章までは、歴史文化学科蔵『四書蒙引』の書誌情報を中心に述べたが、本章では、『四書蒙引』がどのような本であるか述べたい。

『四書蒙引』は、朱子学で重んじられた『大学』『中庸』『論語』『孟子』の四書の注釈書である。「蒙引」という書名には、初学者を導くという意味が込められている。

作者は明の蔡清（一四五三―一五〇八）、字は介夫、号は虚齋である。福建省の出身で、南京の国子監祭酒（最高学府の長官）まで務めた。『四書蒙引』以外に、五経の一つである『易経』の注釈書である『易経蒙引』などの著書もある。

全国漢籍データベースを見れば、現在日本には明本だけでなく和刻本の『四書蒙引』も多く残されていること

がわかる。この『四書蒙引』が日本で広く読まれた証左と言えよう。

以下、本書が出現した背景および（日本でも）盛行した理由について述べたい。

（一）朱子学について

南宋に朱熹によって始められた朱子学は、やがて官学としての地位を確立し、朝鮮、日本にまで大きな影響を与えた。日本の江戸時代に広く学ばれた儒教はこの朱子学が中心であった。朱子（朱熹）は、それまでの五経（『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』）に加え、四書（『大学』『中庸』『論語』『孟子』）を重んじた（ただし『大学』『中庸』はそれぞれ『礼記』の一篇）。

官吏登用試験である科挙でも当然この四書が重んじられた。四書は朱子の注（集注）もあるが、よりわかりやすい注釈を目指して多くの注釈書が出版された。『四書蒙引』もそのような科挙対策の四書注釈書の一つである。

(二) 明人の注釈について—その訓詁学史における位置

儒教の經典の注釈は、大きく古注と新注に分かれる。

古注とは、儒教が国教化した漢代から唐代までの注釈を指し、訓詁に優れるとされる。一方、新注とは、先に述べた宋代に起きた革新的儒教・朱子学の注であり、訓詁を軽視するわけではないが、哲学的解釈（聖人の意図を読み解くこと）を重視し、理気二元論による説明など高い思弁性をその特徴とする。朱子学以降の時代においては、清代に「实事求是」をモットーとする考証学（漢の学問を復興しようとしたため「漢学」とも呼ばれる）が起り、朱子学の意図的解釈が批判されるようになる。以上のような儒教の解釈史において、高い思弁性を發揮した宋学と綿密な考証に優れた清朝の漢学の間に位置する「明学」は、訓詁学上の評価は高くない。思弁性では宋学に及ばず、清の学問のような厳密性もない、いわば中途半端な取るに足りない注釈というのが一般的評価である。一方で明代には理屈を重視する朱子学に対して、直感を重視する陽明学が起きた。明代には、この陽明学

の影響もあり、また科挙のための学問となった影響もあつてか、朱子学は、その生気を失い、陳腐な注釈だけが登場するようになったというのが一般的解釈である。

だが、明代の儒教注釈書は江戸時代の日本でも盛んに読まれた。²⁷それは、上記のような理由で読みやすい（通俗的）ことが大きい理由であろう。また、当然、江戸時代にあつては、当時出版された最新の中国書であつたということもある。

これら日本に渡つた明代の儒教注釈書を見ると、内容形式の両面においてその通俗性を確認できる。内容においては、当時の口語による解説がつけられていたりする。形式においては、注釈の形式が、「伝統的「注」「疏」（＝注の注）形式だけでなく、今で言う「余説」「解説」に当たる様々な注釈構造を持ち、わかりやすくする工夫がされている。『四書蒙引』には図も多く見える。²⁸

特に、李九我『文林貫旨』という本は、簡潔な本文の間に文言を挿入することで、本文自体をわかりやすい漢文に直す工夫がされている。例えば、『大学』冒頭の部分は、「大学之道（果安在哉。其）在（察識扩充以）明（其

本〕明〔之〕徳〔焉〕〕となつてゐる（一）内が補われた文字⁹⁾。現代日本語に訳せば、「大学の道は〔果たしてどこにあるのだろうか。それは、明確に認識しそれを拡充することによつて、本来〕明〔らかな〕徳を明らかにすることにゐる〔のだ〕」のようにならなう。

また、興味深いのは、印刷にも通俗性が現れていることである。上記の『文林貫旨』には、穷（窮）、圣（聖）、为（為）、办（辨）、过（過）、无（無）、应（応）、观（観）、弃（棄）、机（機）、后（後）、择（択）、泽（沢）、义（義）、实（実）、虽（雖）、亲（親）、尽、时（時）、权（権）などの現代の簡体字と同じ略字が見える。本『四書蒙引』でも「得」がさんずいの「得」になっていたりする（間違ひではなく俗字である）。また、印刷や装丁もいかにも雑なものが多い。

以上のような通俗性は、正統的儒学を重んじる立場からは価値が低いものとされるが、それならではの価値がある。例えば、現在の日本でも受験参考書の類は図書館に収蔵されることは少ないであろうが、後世、当時の教育を確認する上では貴重な史料になるだろう。同様に、

当時の中国および日本の教育を知る上で、上記の通俗的科挙参考書は重要な史料となる。何より、広く読まれていたという点は重要だからである¹⁰⁾。

また、特筆すべきは、中国で軽視されていた本が、日本では舶来の本として、後生大事に保存され、今となつては貴重な史料となつてゐることが多い。

本『四書蒙引』も、日本においても貴重書として保管する価値があるかどうかは議論の余地はあるだろう。一昔前であればそうされなかつた可能性が高いし、少なくともこの書を貴重書登録している図書館はほほないはずである。ただ、だから価値がないかと言うとそうではないことは以上からおわかりいただけるであろう。

（三）『四書蒙引』のテキストについて

本章冒頭で述べたように、『四書蒙引』は現在、日本の多くの図書館に所蔵されている。また、大東大学図書館所蔵図書においても、「四庫全書」の中に見ることができる（図8、参考文献参照）。また、大東文化大学図書館には、和刻本の『四書蒙引』が貴重書として所蔵さ

れている（下記4の版本、寛永十三年刊）。「市村理吉氏寄贈」印が押されているが、上述の二目錄に収録されていない。また、『大学』と『孟子』だけあり、『中庸』と『論語』はない（計十二冊）。

『四書蒙引』のテキストを確認するため、以下、国立公文書館内閣文庫および東京大学東洋文化研究所蔵本の調査結果を報告したい。¹⁾

内閣文庫

内閣文庫には数本見える。（画像が公開されている。予約なしに館内で現物を閲覧、撮影することもできる。）

(図6) (図7)

1、四書蒙引 277-0014 十五冊 明崇禎八刊(一六三五年)。旧高野山釈迦文院蔵書。

*大東本と同じ刊本。ただし、縦は二三・二cmとやや短い。

*「発見」もとの表紙が残る。（焦げがあり（火事の跡）、案の定薄い紙。）

*シミの跡もある。

*冒頭に「林希元序」（嘉靖丁亥（六年、一五二七年）

と崇禎八年（一六三五年）の出版許可書が見える。おそらく崇禎八年（一六三五年）以降の刊本であろう。

：大東本はこれ（他に告示（出版許可書）も）が抜かれた（欠落した）のであろう。

*書き入れはない。

：表紙が焦けてもシミがあっても破損があっても修理しつつ大事に保管されている！

2、四書蒙引 経 039-001 二十冊 明刊本。旧紅葉山文庫。

二五・六×一六cm。

序の匡郭：二〇・三×二九・七cm。

本文の匡郭：二〇・二×二九・七cm、每半葉十行、一行二十四字。

*紙、印刷ともにきれい。

3、四書蒙引 277-0046 十四冊、明刊本。旧林羅山蔵書。

2と同じ刊本に、林羅山の書き入れがある。

二六×一五・八cm（匡郭は2に同じ）。

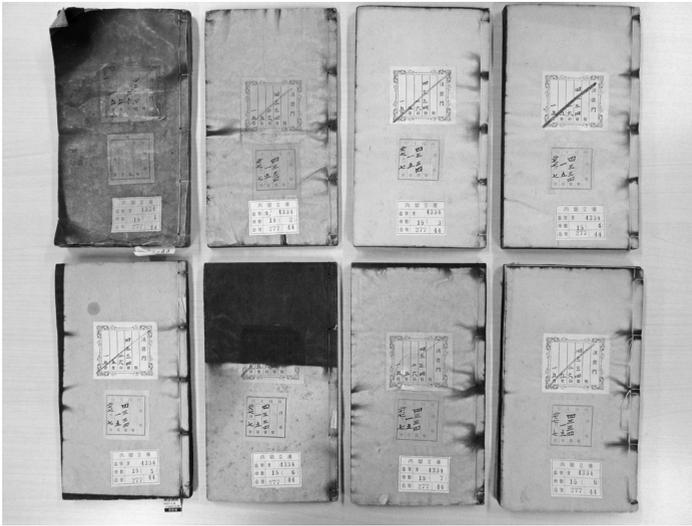


図6 内閣文庫蔵『四書蒙引』（大東本と同じ明刊本）

*表紙がもともとの薄いもの。火災に遭った焦げ跡が見える。

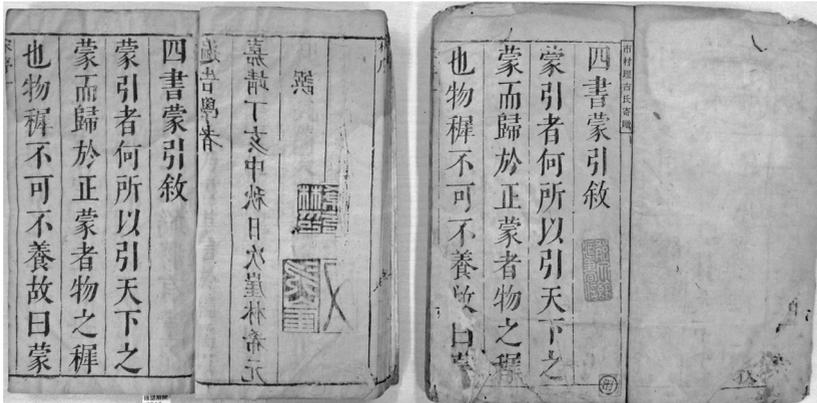


図7 内閣文庫蔵『四書蒙引』（左）と大東本『四書蒙引』（右）（ともに同じ明刊本）

*内閣本には冒頭部に大東本にない林希元序および出版許可書が見える。

*書き入れあり。大東本と比べると発見があるかも。

4、四書蒙引 277-045 十五冊、寛永十三年刊本（和刻本）。旧昌平坂学問所蔵本。

二七・五×一九・七cm（匡郭：一九・七×二九・三cm）。

277-0088（二七・五×一七・〇cm）、277-0050も同じ和刻本。サイズは若干違う。

*2の明刊本に似るが訓点が付されているほか、サイズも若干違う。↓同明刊本をもとに作られた和刻本であることがわかる。

*内題の後に「南京国子監祭酒蔡清著／巡按福建監察御史敖鯤重訂。」とある。

*大東文化大学所蔵の和刻本はこの版本である。（大学と孟子で十二冊と同じかどうか確認したい。）…内閣文庫

『大学蒙引』一冊

『孟子蒙引』十一冊（九上下（孟子序、梁惠王）、十上下（公孫丑）、十一（滕文公）、十二上下（離婁）、十三（万章）、十四（告子）、十五上下（尽心））

以上のように、国立公文書館内閣文庫には複数の『四書蒙引』が所蔵されている。またその来歴が明示されていることにより、この書を江戸初期の有名な儒者・林羅山も読み、幕府の文庫や昌平黌にも蔵書され、日本で広く読まれていたことがわかる。

東京大学東洋文化研究所

東京大学東洋文化研究所に所蔵されている『四書蒙引』は和刻本である。内閣文庫の和刻本と同じ寛永十三年刊本。

『四書蒙引』十五卷 明・蔡清著、明・敖鯤重訂。

*サイズは明本より一回り大きい。二七・四×一七・八cm

（匡郭：一九・七×二九・三cm）。

*表紙に「東方文化学院」のラベルが貼られている。

*巻十の末尾に「忒？拾用？之内／羽州庄内清川村／齊藤治兵衛」という見せ消ちの書き入れがある。

*序文を以下のように正すが正しいか？

蔡清序1b「既而冗中翻目遺之。至京…」↓「既而因冗翻自遺之。逮至京…」

以上、国立公文書館内閣文庫および東京大学東洋文化研究所に所蔵されている『四書蒙引』の報告をした。内閣文庫に複数のテキストが所蔵されていることはその来歴が重要であることがわらう。また、特筆すべきは、両機関とも、貴重書とはしておらず、外部者である筆者が自由に閲覧できた(内閣文庫においては撮影もできた)ことである。大東文化大学図書館との違いには驚くばかりである。

(四) 『四書蒙引』の解釈の例

『四書蒙引』は、朱子学に基づき、朱熹の『四書集注』や科挙の標準として明の永楽十三年(一四一五年)に完成した『四書大全』の説を引いて、その説を敷衍している(図8)。だが、これらの説を絶対視するのではなく、作者の蔡清が疑問を感じた箇所には、自ら合理的でわかりやすい解釈を追究している。⁽³⁾

『論語』には、「己の欲せざる所、人に施すこと勿かれ」など、格言として今の日本でも人口に膾炙する文句が多い。ただ、例えば「遠慮」など、『論語』に由来す

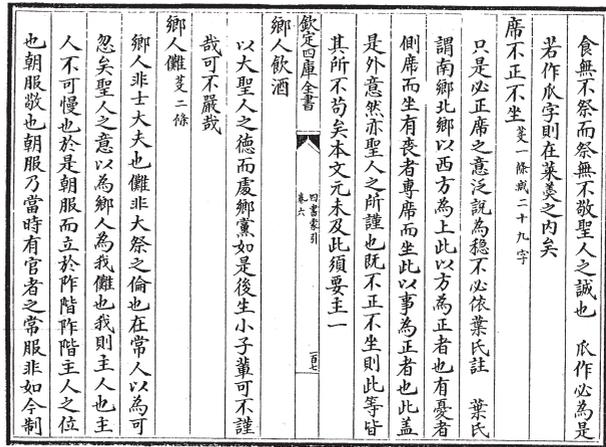


図8 『四書蒙引』の注釈の様子
 (『景印文淵閣四庫全書』第二〇六冊)

* 章の名を挙げた後に、段下げして注釈本文がある。ただし、画像は四庫全書本であり、以下に引く歴史文化学科蔵本とは文字の異同がある。

るが現在の日本語の意味が原文とは異なっている文言もある。「席正しからざれば坐せず」もそのような文言の一つであろう。現在の日本では、「(上坐、下坐など)しかるべき席(席順)でない」と座らない)のように解され

ることがあるが原書の意味はそうとも限らない。

以下、『四書蒙引』がわかりやすく合理的な解釈を求めた例として、郷党篇の「席不正不坐」をめぐる議論を紹介したい。

この文句の古注の解釈は、「席正しからざれば坐せず」（席が正しい状態でなければ座らない）である。¹⁴そして、朱子の新注も、この古注の解釈を引き継ぐようだ。¹⁵正しさに厳格に拘り、不正な状態を許さない朱子学が好みそうな解釈であろう。

それに対して、『四書蒙引』では以下のように言う。

只是必正席之意。一説、正席是其身之正於席也。与正席条朱子小註及曲礼之言不合。只做泛説為穩、不必葉氏註。○葉氏（*『四書大全』『葉氏少蘊』≡葉夢得）謂「『南郷北郷以西方為上』*説解者は「正」に直す」、此以方為正者也。『有憂者、側席而坐。有喪者、專席而坐』、此以事為正者也。」此蓋是外意、然亦聖人之所謹也。既不正不坐、則此等皆所不苟矣。本文元未及此、須要主一。○大註曰「聖人心安心於正、故於位之不正

者、雖小不処」、只是大概常説。如葉註云々、却是「不得其醬不食」之意。（『四書蒙引』上論六卷^{14a}「席不正不坐」（郷党篇）

*四庫全書本（芟一条二十九文字）「只是必正席之意。泛説為穩、不必依葉氏註。葉氏謂「『南郷北郷以西方為上』、此以方為正者也。『有憂者、側席而坐。有喪者、專席而坐』、此以事為正者也。」此蓋是外意、然亦聖人之所謹也。既不正不坐、則此等皆所不苟矣。本文元未及此、須要主一。」

（ただ必ず席（*座席の敷物）を正す（*きちんと座る）という意味である。一説に、席を正すとは、その身を席に対して正しくすることだと言う。「だが、同じ郷党篇」「正席」条（*「君賜食、必正席、先嘗之」）の朱子の小注（*「食恐或餒餘、故不以薦。正席先嘗、如対君也。言先嘗、則餘當以頌賜矣。」および「〔礼記〕曲礼篇の言と合わない。ただ一般的なことを言ったとらえるのが穏当で、必ずしも「〔四書大全〕が引く」葉氏の注のようではない。○葉氏（*葉夢得）は「〔礼記〕曲礼上篇に言う」「南北に向き合っ

ている場合は西を上とする』は方角をもって正しい(という基準)とするものである。(『礼記』曲礼上篇に言う)『憂いがある者は、席に斜めに座る。葬儀があった者は、一人だけで座る』は事柄で正しい(という基準)とするものである」と言う。これはおそらく言外の意であるが、だが聖人が謹んだところでもあるだろう。正さなければ座らなかつたのであるから、こういうこともなおざりにしなかつたであらう。「だが」本文ではもともとそこまで言っていないので注意すべきだ。)○大注に「聖人は心が正しい状態に落ち着くので、位が正しくない場合には、小さいことであってもおらない(身を置かない)」と言うのは、ただ、一般論である。葉氏の注云々は「同じく郷党篇に」その(適当な)調味料が得られなければ食べない」という意味である(*『論語』郷党篇「割不正不食、不得其醬不食。」)。

ここで、蔡清は朱子や『四書大全』の言う「聖人は正しさに拘った」という説を一般論として認めつつも、こ

この解釈に適用するのは牽強附会だとする。蔡清の解釈では「席―今の座席ではなく座布団のように上に敷くもの―を整えてから座った」という意味で、善悪判断に拘り、悪と見なせば絶対に座ることを拒否したという意味と解するのは誤りだとする。訓読すれば、「席正さざれば坐せず」(敷物を整えてから座った)となろう。¹⁶⁾蔡清が穩当かつ合理的な解釈を好み、理想的聖人像を個々の解釈に適用する教条的解釈に反対していたことがわかるであらう。

おわりに

本稿で明らかにしたように、大東文化大学図書館が廃棄した『四書蒙引』は、その本の性質、来歴のいづれからしても所蔵する価値を有する資料であり、また、廃棄せざるを得ない本の状態であったとも思えない。もしこの資料の状態に問題があつたとしても、それは収蔵される時点ですでにこのような状態にあつたと思われる。そして、その後、一切見られることなく今日に至り、ようやく手に取られたかと思うと即、廃棄処分となつたので

ある。これでは本の墓場ではないか。

そもそも本の状態が悪かったとしても、まずは修復を考え、それが予算上できない状態であっても将来に委ねることを考えるべきであろう（注2参照）。今後、このような安易な廃棄が行われないことを切に願う。

本稿を読んでいただければ、大東文化大学図書館の本がいかにか活用しにくい状態にあるかわかりただけであろう（第四章（三）の内閣文庫・東大東洋文化研参照）。それは、本校の教員、学生だけの問題ではない。基本書誌情報も公開していないことは学問界全体にとっても問題である（第三章・東京大学に郁文館蔵書を発見できたのは同図書館の詳細な書誌情報公開のおかげである）。宝の持ち腐れとはまさにこのことであろう。本校図書館が活用しやすいよう環境を整えること、基本的な書誌情報を調査・公開することは社会に対しての責務である。今回、本資料について基礎的報告を書くことができたのは、本資料が廃棄処分にあったからというのとは皮肉である。それは、廃棄処分されたことによりきちんと研究できる状態になったことを意味するからである。これは

当然、他の資料（貴重書登録されている本、および貴重書庫に保管されている本）についても言える。これらの資料は今のままだと活用が難しいが、活用の便を図れば本稿で行ったような調査やより深い研究が可能になる。本校図書館は図書を開利用を促進し文化に寄与する意思があるのかどうか改めて問いたい。

筆者が一番心配なのは、温度・湿度管理ができない環境で保存することになるこの資料は、今後劣化は免れないであろうことだ（研究室や個人で保管されている和本が知らない間に無残な虫食いに会った例をいくつも目にしてきた¹⁸⁾）。筆者は、本書は、本校の財産として、世間に公開できる形で、しかるべき環境で保存され続けるべきであったと考えている。戻す機会があればそうしたい。ただ、不幸中の幸い、本歴史文化学科において本資料が自由に活用できる状態を無駄にせず、本学科において教材として有効活用されることを祈る。本稿で明らかにしたような書誌を確認する材料として使うこともできるし、『論語』の注釈として読みやすいものなので訓詁の実例として活用することもできる（第四章（四）参照）

と考える。

注

(1) 大東文化大学図書館では、和綴じ本は軒並み貴重書と分類するなど、貴重書の分類そのものに問題がある（これが私の個人的意見かどうかは他の図書館の基準と比べると明らかにできるであろう）。また、その貴重書あるいは準貴重書の閲覧の制限が厳しく、学内の教員であっても自由に図書を閲覧することができない。書庫の立ち入りを含め、図書閲覧の便を向上すべきであると考える。図書館の意義は、図書の保管と閲覧の便の提供にあるだろうが、本校図書館の任務は後者に重きを置くべきではないのか。

(2) 歴史資料ネットワーク（史料ネット）で、破損資料への基本的な対処法が紹介されている。同ネットワークは一九九五年の阪神淡路大震災以降、被災地での歴史資料の救出活動に取り組んでいる（二〇二〇年一月二六日放送の「日曜美術館」でも紹介されていた）。同ネットワークでは損壊したからと言って何よりもまず捨てないでと呼び掛けている。

(3) 『四為齋文庫目録』（KC3354）の書誌情報
二二・七×一七cm。

〔表紙〕外題「四為齋文庫目録」「昭和七年八月」印「□□」。

*末尾に「昭和六年度ヨリ写了」とある。

・内表紙「吉田英厚」「四為齋文庫／市村理吉」

・版心（柱）に「四為齋」とある専用に印刷された和紙の用箋五十五葉にきちんと分類されて書名が列挙されている。冒頭に四書類が並んでいるが『四書索引』は見えない。41b-42aに「四為齋文庫書目」が、第一号から第六号まで見える。第五号には六年度、第六号には昭和七年度とある。理吉が同書目を随時補訂していたことがわかる。

(4) 『四為齋文庫書目』（KC3420）の書誌情報
一八×一二cm。

〔表紙〕外題「四為齋文庫書目」「昭和十八年八月」印「□□」
「吉田英厚」「四為齋文庫／市村理吉」

・手書き

・辞書類が最初にまとまっているが、その他はきちんとした分類なしに、書名が列挙されている。書名の下に数字があるのは巻数らしい。

・28a?（葉数はふられていない）に「四書索引 蔡虚齋
二十」とある。

(5) 和綴じ本は線装本とも呼ばれる。この線とは糸のことである。この糸はほつれると随時綴じ直された。その際、傷んでいる表紙が替えられたり、上部（多くの和本では書き入れ用の大きなスペースがある）が切りそろえられたりした。和綴じ本は随時、部分補修が可能だったのである。

(6) 現代人の目から見れば書籍を傷つける行為に思われそうだが、中国、日本の書籍では所蔵者が書籍入手後、蔵書印を押す習慣があった(ただ今でも図書館の蔵書印は押されている)。一般に、古い蔵書印が下に、新しい蔵書印が上に向かって押されていくことが多い。このような蔵書印はそのテキストの来歴を確認する上で重要な情報である。

(7) 朱子学を標榜していた大阪の懷徳堂の儒者も多く明人の注釈を読んでいたことが確認できる(藤居岳人「懷徳堂儒学の研究」(大阪大学出版会、二〇二〇年) 第三部第一章「中井竹山の経学研究」など)。

(8) 図が見える箇所。中三28a(喜怒図)、中四4b・5a(周大裕図)、上論94b・96b卷六94b(賓?図)、卷六96b(根闌図)、上孟917a(明堂太廟、太廟太室)、上孟十48a・61(破れあり)、132(破れた切れ端が挟まっている)、上孟十一15a・16b、50b・51a、下孟十二16a・17a(五音相生之図、三分損益之図、隔八相生之図)。

ちなみに、蔡清には、『四書図史合攷』という著作もある(国会図書館に寛文九年和刻本あり)。* 卷六内題に「明晋江 蔡清虚齋 輯」とある。

卷七2b・3a八佾樂舞之図、卷八7b瑚璉図、卷十5a籩豆図、卷二十二10a旌図、旒図(18a・b 割烹::文のみ) … 『四書蒙引』下孟十三卷57bにもあり。卷二十三2a厄図。

(9) このような注釈は日本でも作られた。例えば、『書経』を

書き換えた中井履軒『典謨接』や河田迪斎(佐藤一斎の養子)『書経挿解』(弘化三年(一八四六))がある。中国のものでは、民国二〇年(一九三一)に出版された李珣精『四書串釈』も同様の形式を採用している。

(10) 儒者の思想を分析する場合、朱子学か陽明学か、はたまた清代の考証学的かという視点で分析し、このどれかに分類したり、いずれとも一致しない点はその儒者の特徴だと判断している場合が多いが、実はこのような明代の注釈書の影響が大きいことは留意すべき点である。ただ、これらの注釈にははつきりした特徴を出せないで、研究として見栄えのするものにならないので現代の研究では取り上げることが少ないのである。

(11) 『四書蒙引』のテキストについては、王素琴『蔡清及其『四書蒙引』研究』(台中教育大学語文教育学系〈博士論文〉、二〇一九年) 第四章第二節に詳しく述べる。

(12) 『四書蒙引』において、「大註」「小註」と書かれているのは、それぞれ『四書集注』の注と『朱子語類』の引用を指す。『四書大全』において、朱子の説が、『四書集注』の注は大きな字で、『朱子語類』の引用は小さな字で表示されていることに基づく。

(13) 王志璋『蔡清『四書蒙引』的治経態度——以『大学蒙引』的詮釈為例』(『東亜漢学研究』第十号、東亜漢学研究学会、

二〇二〇年)は、『四書索引』が『四書大全』を補う挙業の書(科挙対策の書)であるにとどまらず、『四書大全』の誤りを指摘するなど一家言を有する書であると評価する。注10に先行研究の紹介がある。

(14) 例えは、『論語注疏』(魏の何晏の集解(古注))と、それに対する宋の邢昺の疏(注の注)がまとめられた書、古注の集大成)の疏には以下のようにある。

「此明坐席及飲酒之礼也。凡為席之礼、天子之席五重、諸侯之席三重、大夫再重。席、南鄉北鄉、以西方為上、東鄉西鄉、以南方為上。如此之類、是礼之正也。若不正、則孔子不坐也。」

(これは座席と飲酒の礼を明らかにしている。およそ座席の礼は、天子の席(敷物)は五重で、諸侯の席は三重で、大夫は二重である。席が南北に向き合っている場合は西が上になり、東西に向き合っている場合は南が上になる。このような類が礼の正しさである。もし正しくなければ、孔子は座らなかつたのである。)：「座席の様子が正しくなければ座らない。」

ちなみに、「席、南郷北郷、以西方為上、東郷西郷、以南方為上」は「礼記」曲礼上篇に見える。経書解釈においては、經典の文句がその証拠として多数引用される。

(15) 朱熹『論語集注』：「謝氏曰、「聖人心安於正、故於位之不正者、雖小不処。」(謝氏は「聖人の心は正しい状態に安ん

じるので、位が正しくない場合には、ちよつとした誤りであっても座らない)：「身分不相応な席には座らない。」

(16) この説は、後に清の劉宝楠が唱えた(『論語正義』卷十三「席が座席に置く敷物であることを説明した上で)不正者、謂設席有所移動偏斜也。：凡坐時、皆有正席之礼。夫子於席之不正者、必正之而後坐也(不正とは敷物が移動し斜めに偏っていることを言う。：およそ座る時には、みな敷物を整える礼がある。孔子も敷物が整っていないときには、必ず整えてから座つたのである。)。)。現代の碩学・吉川幸次郎氏もこの説に賛同している(吉川幸次郎『論語』上(朝日新聞社、一九八四年)三四四頁)。

(17) 「五井蘭洲著『茗話』における未翻刻部分の存在について」(大阪府立大学高専紀要』第五〇巻、大阪府立大学工業高等専門学校、二〇一六年)では、大阪大学文学部国文科が購入した(他の現存テキストにはない貴重な中巻を有する)五井蘭洲著『茗話』が、虫食いによる破損で多くの部分が解読不能な状態になったことを述べた。その他、「水田紀久先生藏『東征帖』」(江戸期の漢文遊記の研究―懷徳堂を中心に)(平成22〜24年度科学研究費補助金研究成果報告書、二〇二三年)所収)では、贋作ではある(これも場合によっては研究対象もしくは研究の参考になる)が『東征帖』という資料がこれまた虫食いにより破損したことを紹介した。

(18) 現在の原稿用紙の起源である和本の用箋の様子(葉(丁)表裏(a b)という頁の数え方など)、帙の目的(本来はペーパーバック状態の和綴じ本を守るため、丈夫な和刻本では要らないとも言われる)やその問題点(特に四方が囲まれたものだとかえって虫が湧く可能性があること)、和綴じ本は本来横積みすべきこと(そのため書名がわかるように小口書きが書かれたこと)など、和綴じ本の基本知識はぜひ教えたい。

参考文献

- ・三浦國雄「大東『漢学』の一側面―市村理吉と四為齋文庫」(『大東文化大学漢学会誌』五十一号(池田教授・三浦教授退休記念号)、大東文化大学漢学会、二〇一二年)
 - ・『四為齋文庫目録』(昭和七年)(板橋貴重書庫 KC3354)
 - ・『四為齋文庫書目』(昭和十八年)(板橋貴重書庫 KC3420)
 - ・全国漢籍データベース <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki>
- * 『四書蒙引』の和刻本が多く見える。

・橋口侯之介『千年生きる書物の世界 和本入門』(平凡社、二〇〇五年)

・佐藤仁之助『漢学捷徑』(東亜堂書房、一九一〇年)

* 一五二頁に以下の朱引きが紹介されている。(すべて本稿で紹介したテキストの書き入れに見える。)

地名…右に単線、国名…右に双線、人名…中央に単線、官名…左に単線、

書名…中央に復線(二重線)、年号…左に復線(二重線)。

「右所、中は人の名、左官、中には書の名、左には年号。」

cf.中国の傍線は、人名・地名には右に単線、書名には、右に波線を引く。

・王素琴「蔡清及『四書蒙引』研究」(国立台中教育大学語文教育系博士論文、二〇一九年)

・王志璋「蔡清『四書蒙引』的治経態度―以『大学蒙引』的詮釈為例」(『東亜漢学研究』第十号、東亜漢学研究学会、二〇二〇年)

* 『四書蒙引』が『四書大全』を補う挙業の書(科挙

対策の書)であるにとどまらず、『四書大全』の誤りを指摘するなど一家言を有する書であると評価する。注10に先行研究の紹介がある。『四書蒙引』のテキストについても詳述されている。

• 『景印文淵閣四庫全書』第二〇六冊「經部二〇〇・四書類」(台湾商務印書館、一九八三〜八六年)

* 『四書蒙引』が収められている。ただし、蔡清原本とは文字の異同がある(図8参照)。